

## イタイイタイ病発生源対策 50 年史

畑 明郎著

本の泉社, 2021 年 9 月 16 日, 2,000 円 + 税, ISBN: 978-4-7807-1823-2

イタイイタイ病の原因物質カドミウムを岐阜県飛騨山中にある神岡鉱山から富山湾河口域まで 60 km 以上運んだのは、高原川—神通川の流れである。俯瞰すると、その流れの姿かたちは毒の苦しみに身をくねらせながら北へと向かう巨大な龍のようにも見えてくる。本書は、この龍の体内に神岡鉱業所によって注入されるカドミウムの量を極力減少させるため、50 年にわたって継続されてきた公害発生源対策事業の当事者による記録である。

住民勝訴が確定したのは 1972 年 8 月 9 日。翌 10 日に行われた被害住民団体・弁護士と三井金属鉱業本社の 10 時間に及ぶ交渉により公害防止協定が締結される。協定には、被害住民と専門家が鉱山・工場に立ち入って排水溝・廃水処理設備・廃滓堆積場などを調査する権利、そして調査に要する費用等はすべて企業側が負担することが確約され、その後の長い調査と対策提言を支える基盤となった。2021 年の第 50 回立入調査までに延べ 7,000 名の被害住民、1,300 名の科学者・弁護士が参加したという。

裁判報道のあった当時、私は小学校 4 年。公害病裁判に関連する記事が連日紙面を賑わせ、住んでいた地域はコンビナートに近く光化学スモッグ警報・注意報が頻発されていた。授業では公害地図を作成し、企業を告発する口調で発表をしたりした。だが、「それなら君は公害病の再発防止のために 50 年間尽力することができますか？」と問われたら何と答えられたか。本書を読みながら、度々そう自問せざるを得なかった。

さて、立入調査はどのように進められたのか。著者はまず関連河川の水質・底質の調査に参加し、73 年の第 2 回立入調査では河川調査に加えて休廃坑等の廃滓捨て場の調査も行う。研究班は目標を「土壌復元後の再汚染を防止する発生源対策」とし「その成果は、当然、非汚染河川と同等の水質レベルまで回復せしめるものであること」とした。5 班により実施された①鉱山における排水対策、②排煙対策、③鉱業所におけるカドミウム収支、④

流域水系における重金属の蓄積と流出、⑤廃滓堆積場の構造安全性についての調査報告が 78 年にまとめられる。重金属汚染の発生源とメカニズムの大略を解明するために 5 年を要したのだ。

委託研究班の解散後は、79 年から協力科学者グループ等が全体立入調査（年 1 回）と専門立入調査（年数回）を実施していく、東西 5 km、南北 15 km の広大な山中のカドミウムの巣窟に分け入り、工場設備はもちろんのこと、シックナー、ポンド、坑内、地下水脈、トンネル、廃坑、水路、廃滓堆積場等々を調査する難事業である。著者自身の撮影になる計 56 枚の写真には調査する被害住民・科学者らの姿も定着されており、現場の空気・湿度・においが感じられる。とりわけ、北陸電力の発電用水路を精査し高濃度カドミウムの湧水を探し当てた際の写真からは、長靴で調査する者たちの胸に湧く思いが伝わってくる。

企業側は、300 億円以上を投じて排水・排煙・植栽等の対策を講じてきた。地下水位を下げるため山にトンネルを開削し、いずれは地下水へと浸透する排煙中重金属の削減のため脱水式処理プラントを導入する。調査⇒提言⇒対策⇒結果検証調査のサイクル過程の本記録は、公害防止対策チャートを次世代に残すことに成功している。また、原発放射能汚染、豊洲地下水汚染、熱海の盛土決壊等の諸問題に対してタイムリーに原則的な対策を求める著者の姿勢は一貫しているが、それは神岡鉱山での知見に裏打ちされているのだと理解できる。

本書では対策成果が淡々と記述され、困難な交渉や苦渋の選択といった心理描写はない。しかし、著者が最後に掲げる写真は、高原川沿いに立つ鹿間工場の「環境安全最優先」の大看板である。原因企業が国道を走る車に向けて、その反省を掲げて対策を実施してきた事実を伝えると同時に、発生源対策を押し進めて目標とした水質レベルを達成した著者の矜持が示された写真なのだ。

木村健一郎（杉並大気汚染測定連絡会）